

PROGRAM NOTE

1973

近藤 謙：オリент・オリエンテーション

不特定の同種 2 楽器のための

Orient Orientation

for 2 Melody Instruments of the Same Kind

《オリент・オリエンテーション》は、不特定の旋律楽器のための二重奏である。楽器は、ロ音から二点ロ音までの音域をカバーするものであれば何でも構わないが、但し、2 楽器は同種のものでなければならない（例えば、2 本のヴァイオリン、2 本のフルート、2 台のハープ、等々）。この作品は、1973 年に、篠崎史子さんからの委嘱で作曲、彼女のリサイタルで、ハープのハーモニックス音のみを用いたソロ・アンサンブル（予め録音されたテープのパートとの合奏）の形で、初演された。

この作品は、私が「線の音楽」——つまり、作品の構造全体が一本の旋律から派生しているといった様子の音楽——として書いた最初の作品でもある。ここでは、2 楽器が一つの同じ旋律をユニゾンで奏する。尤も、ここで云う「ユニゾン」は、非常に広い意味でのユニゾンである。曲は、4 つの部分に区分できるだろう：(1) 2 楽器が完全なユニゾンになっている部分。(2) 音高はユニゾンだが、リズムについては、第 2 奏者が少し遅れることで、ずれが生じる。(3) リズム的には完全なユニゾンだが、音高が時折異なる。(4) 音高もリズムも時折異なる。2 楽器間のこのような少しずれのあるユニゾンから、ヘテロフォニー的なテクスチャーが齎される。しかし、私はそれを、「ヘテロフォニー」よりも、むしろ、「ユニゾン合奏」と呼びたい。ヘテロフォニーとは、一つの旋律とその変異形とを同時に奏すること、即ち、同一の起源をもつ複数の旋律の集積を意味する。それに対して、「ユニゾン合奏」は、異なった旋律の集積ではなく、一本の旋律線に隙間を入れる（或いは、割る）ことによって、旋律というような非常に単純な音楽構造でさえ、その簡明に見える表面の背後に複雑さを秘めた複合体であるということを開き示そうとするものなのだ。

題名の「オリент・オリエンテーション」という言葉は、この曲を作曲していたときに読んでいたジャック・デリダの『グラマトロジーについて』の中の文章から取ったのだと思う（多分この本だったと思うのだが、最早、記憶が定かではない）。しかしこの曲は、デリダの本の内容とは何の関わりもない。私は、この言葉の意味ではなく、響きに魅せられて、ちょうどよい題だと思って借用しただけである。

多分、この題名（直訳すれば、「東洋案内」とでもなるのだろうか）と、そして、曲のヘテロフォニー的なテクスチャーの所為なのだろう。私は、評論家から、この作品に東洋音楽からの影響が——もっと具体的には、ヘテロフォニー的な性質を持つ日本の伝統音楽からの影響が——あるのではないかと尋ねられることがある。

PROGRAM NOTE

しかし、今述べたように、この曲を書いたときの私は、伝統的なヘテロフォニー技法を用いて曲を構成しようと考えていたわけではないし（実のところ、当時の私は、そうした伝統的な技法についてあまり多くを知らなかった）、又、題名の言葉の意味を気に掛けていたわけでもない。もし、この曲が、日本の伝統音楽（日本の伝統音楽の何らかの曲種）に似ていると感じられるとしても、それは単なる偶然であって、決して意図的なものではない。

近藤 譲

初演：1973年3月(東京)

初演者：篠崎史子(ハープ)[予め録音されたテープを用いたソロ・アンサンブル]

委嘱：篠崎史子

出版：University of York Music Press (UK)

録音：AL-1, ALCD-1, ALCD-67

演奏時間：8分